夢に向かって

夢は大きく、自分で切り開く――

佐藤　凪（なぎ）さん（県北中３年）　第25回

僕の将来の夢は、夢を与えられる人になることです。はっきりと決まってはいませんが、国会などの政治にも興味があるし、日本史が好きなので、社会の先生にもなってみたいです。どんな職業に就くかは分かりませんが、夢は大きく持っていたいと思います。

将来について考えるきっかけになったのが、公営塾ハルの「スキプレゼン」に参加したことです。「人生において大事にしたいスキ」というテーマだったのですが、今までで一番将来のことを突き詰めて考える時間になり、自分のなかでは大きな出来事になりました。

今は最後の中体連に向けて部活動のテニスに力を入れています。団体戦では県ベスト４以上、個人戦では県ベスト16以上を目指しています。受験の年でもあるので、志望校に合格できるよう勉強と部活動の両方を一生懸命頑張りたいです。

大人になっても、ずっと国見町に関わっていきたいと思っています。どんな形で関われるかは分かりませんが、選択肢を広げるためにいろいろな経験を積んで、最適な道を自分で選べるように努力していきたいです。

町長コラム

真（ま）こらむ

【第34回】

移ろう時の中で

穀雨のころ。内谷・春日神社太々神楽。葉桜の境内に人が集う。ハレの気配。控えめだけど上気の賑わい。久しぶりに会う人同士のあいさつの輪。

お社の前で会った鴨田清一さんと話していたら、神事で奉納する神楽が始まる。すると「お、舞ってるの、うちの孫だな」と。「内谷も若い人が少なくなって、神楽保存会も大変なんだぞ」と言いながら、舞う孫を見るのはうれしそう。

４年ぶりに、福島大学・岩崎由美子先生とゼミの学生も参加。学生たちは神事での正座は、かなりキツそうだったけど、神楽を見たり、お振舞いを食べたりしながら内谷の人や訪れた人たちと交流。内谷の人たちも「また学生たちが来てくれた。若い彼らが来ると皆が元気になる」と歓迎。感染症で中断したけど、それ以前の５年ほどの間に築いた関係はなくなっていない。その深度と密度はすごい。

明治15年（1882）の最初の奉納から100年目の昭和57年（1982）に内谷春日神社太々神楽保存会ができる。神楽の伝承は氏子の男子との決まりごとも、今は国見町全域の子どもにまで広げる。今日も、保存会の人たちから教わった子どもたちが、氏子たちが山から切り出した木で建てた神楽殿で舞う、奏でる。

歴史は、移ろう時の中で、真髄は不変だけれど、その時々の状況に、その時代の人たちの思いと知恵を加えて、アップデートされながら受け継がれていくものなのかもしれない。人が、とてもしなやかで、たくましいように。

引地　真

VEGETABLE OIL INK
編集発行　国見町
UD FONT

〒969-1792　福島県伊達郡国見町大字藤田字一丁田二1-7
TEL 024-585-2111　FAX 024-585-2181
E-mail somu@town.kunimi.fukushima.jp　URL www.town.kunimi.fukushima.jp/